

令和4年度 兵庫県立こばと聴覚特別支援学校 各学部・分掌部重点目標に対する評価

令和4年度 兵庫県立こばと聴覚特別支援学校 各学部・分掌部重点目標に対する評価					
学校経営の重点	*幼児期の教育は、その後の学校教育全体の基盤を培う役割を果たしており、本校は、聴覚障害幼児の早期教育を使命とする特別支援学校である。 ・幼児期にふさわしい生活を通して、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」「障害による困難を改善・克服するための力」を育む。 ・家庭と連携して心の基盤を形成し、様々な人々との交流や、家庭ではできない豊かな経験ができる場とする。 ・一人一人の発達の特徴や特性、障害の程度に応じ、保有する聴覚や視覚的な情報を十分に活用し、言葉を用いて人との関わりを深め、言葉の習得と概念の形成を図る。				
	(ア) 聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。 (イ) 幼児一人一人の実態把握を的確に行い、聞こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。 (ウ) 家庭と協力をして教育を進め、愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。 (エ) 保有する聴覚や視覚的な情報などを活用し、興味や関心をもって取り組むことのできる活動を創意工夫し、様々な経験を積みながら言葉を習得できるようにする。 (オ) 社会・文化・自然などに触れ、幼児の自発的な活動としての遊びや様々な人々との交流や、発達段階に応じた学習形態や指導内容を工夫した食育、防災や安全教育等を通して、生きる力の基礎を培う。 (カ) こばと聴覚支援センターの発足により、関係機関や地域等とより一層連携し、聴覚障害児の早期教育・支援に取り組み、聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
自己評価基準 A達成している ■ B おおむね達成している ■ Cあまり達成していない ■ D達成していない ■					
学部分掌	学校経営の重点		評価		
	各部の実践目標	成果と課題	各部評価	校内評価	校内評価グラフ
保育相談部	(ウ) 家庭と協力をして教育を進め、愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。				
	季節の移り変わりを感じられる環境を設定し、保護者と幼児と一緒に楽しめるように具体的な支援を行う。	教室内では季節や行事に沿った掲示や歌あそびをしたり、製作を取り入れたりした。生き物(ザリガニや金魚、バッタやカマキリ、カタツムリ、アオムシなど)の飼育や、畑での野菜の収穫等、親子で自然に触れることができる保育を年齢に応じて設定した。様々な体験を通して、親子で話をするきっかけを提供することができた。	A	A	
幼稚部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。				
	一人一人に寄り添いながら、子どもたちの心が動く瞬間がたくさんある保育を行い、日々の生活を楽しみながら言語の獲得が行えるようにする。言語、身体、気持ち等、様々な面で成長が遂げられるように、やりとりや経験を重ね、子どもたちが主体的に活動に取り組めるように支援する。	こばとの中の自然や、絵本、季節のものなどを用いて、実際に見て触れて学ぶ時間を多く作った。その中での子どもの気づきや思いに共感しながら言葉掛けを行った。また今年度はコロナ感染症の対策をしつつ、昨年に比べ幼稚部全体で、体をしっかりと動かす活動にも取り組むことができた。3クラス合同で活動する時間を定期的に取り入れたこともあり、他のクラスの友達を誘ったり、自分から話しかけたりする姿も多くみられ、縦の繋がりも深めることができた。	A	A	
自立活動部	(イ) 幼児一人一人の実態把握を的確に行い、聞こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。 (エ) 保有する聴覚や視覚的な情報などを活用し、興味や関心をもって取り組むことのできる活動を創意工夫し、様々な経験を積みながら言葉を習得できるようにする。				
	個々の発音の実態に合わせて、発音遊びや発音個別のなかで、口・舌の運動や呼吸・発音要領の練習に取り組み、呼吸の習熟や発音要領の獲得を目指す。また担任や聴能担当者と情報を共有し、生活の中にも発音練習を取り入れ、定着を目指す。	子どもが興味を持てるような教材や題材を使って指導を行ったり、視覚的にわかりやすく教材を提示したりすることで、発音要領の獲得や呼吸の習熟につながった。また聴能担当やクラス担任と情報共有し、発音指導や保育での取り組みに活かすことができた。	B	A	
	様々な旋律やリズムを聞き取り、それに合わせて体を動かす遊びの中で、個々の実態に合わせてながら、聴覚の活用を促し、体全体で音楽を表現することを楽しくできるように支援する。また、色々な楽器に親しむことで、音の世界の広さに触れられるようにする。	歌うことや楽器を鳴らすことを最大限楽しめるように、子どもの聴力や実態に合わせて担任と相談しながら活動内容や支援方法を考えた。歌詞の理解を促すために歌詞の意味を表した絵やイラストを使用したり、音階が視覚的に分かりやすいように色付き楽譜を使用したりして、苦手意識を軽減し、音楽を表現することを楽しくできるように工夫した。	B	B	
人との会話や指示を聞く時の姿勢や、聞こえづらい時にどのように対処したら良いか、補聴器や人工内耳・ロジャー等の機器の扱いなど、小学校入学を見据えた指導を中心に担任・発音担当・保護者と情報共有しながら、幼児の実態に合わせて聴能個別を実施する。	聞こえづらい様々な環境を設定し、幼児が実際に体験しながら聞こえにくい状況での対処法や、どのような音環境が良いかを学べるようにした。また、語音検査や発音明瞭度検査等の結果を担任や発音担当と共有し、情報交換や新たな課題設定に繋げた。	B	B		
聴覚支援センター・支援部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。 (カ) こばと聴覚支援センターの発足により、関係機関や地域等とより一層連携し、聴覚障害児の早期教育・支援に取り組み、聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
	[聴覚支援センター] こばと聴覚支援センターの発足を関係機関等に広報することで、早期の支援につなげ、関係機関と連携を取りながら、保護者支援、聴覚障害児支援を行う。	今年度より実施された兵庫県ユニバーサル推進課主催の聴覚障害支援力向上研修を本校で2回実施した。保健師、児童発達支援事業所職員、小中学校の教員等に対し、本校の教育や早期支援について説明し、理解啓発を図った。その後、児童発達支援事業所など、新たな機関からの紹介が増えた。病院との連携では、オンラインによるケースカンファレンス、言語聴覚士による相談や情報交換、研修を実施し、教育活動や支援の参考となった。	B	B	
	[支援部] 個々の幼児に応じた適切な進路選択を学校全体で支援していけるように、学部長や担任、研究部とも連携し、進路支援計画を作成する。	今年度は進路支援委員会を3回実施し、学校全体で幼児個々の進路について情報共有し、話し合う機会を設けた。進路支援計画については、検討を継続中である。	C	B	
総務部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の心身の調和のとれた発達を促すための教育的支援を行う。				
	・入学式や始業式等の儀式的行事において、見通しが持てるよう、式次第の言葉や簡単な物にしたり、イラストを用いたりする。また、校歌斉唱の手に幼児を指名し、達成感を得たり、他の幼児の意欲や関心に繋げられたりするようにする。 ・各種防災訓練について、有事の際に適切に行動できるよう、わかりやすい視覚教材を提示し、避難の流れに見通しを持てるようにする。	・校歌斉唱の手にについては、新型コロナウイルスの感染対策のため中止した。今年度は実施できなかったが、今後も感染状況が落ち着いたら実施したり、別の方法を模索したりして、幼児の達成感や意欲につながる支援を考えていきたい。 ・各種防災訓練について、クラス毎で実態に合わせて視覚教材等を用いて説明を行った。火災避難訓練では、実際に煙を炊いたり、消防署員に説明してもらったり、消防車の見学をしたりすることで、幼児の印象に残る訓練となった。	B	B	
教務部	(イ) 幼児一人一人の実態把握を的確に行い、聞こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。				
	子どもたちの実態、幼児期の終わりまでに育てほしい姿を踏まえて教育活動が展開できるよう情報共有や意見交換などを行う。次年度に向けて校務支援システムへの移行を進めていく。	「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」の10項目や、「幼児期において育みたい資質・能力」についての資料を配布し、教育活動の参考にしてもらうようにした。校務支援システム導入に向けての説明会を開き、幼稚部は今年度の指導要録からシステムに移行していく。	B	B	
生活・保健部	(オ) 社会・文化・自然などに触れ、幼児の自発的な活動としての遊びや様々な人々との交流や、発達段階に応じた学習形態や指導内容を工夫した防災教育を通して、生きる力の基礎を培う。				
	望ましい食習慣の形成を目指し、幼児の食に関する興味や関心が育つよう、季節や行事に配慮した給食を実施し、野菜の栽培活動等を始めた食に関する体験活動の機会を設ける。	野菜の栽培や皮むき等の例年校内で実施している体験活動の他、かまどごはんを炊く体験をする「ごはん塾」の機会を設けることができ、幼児は興味を持って取り組んでいた。その他の食品が料理になる過程を体験する機会を設けることは困難であった。	B	B	
	各クラス前に掲示している子どもたちの作品を、他クラスの親子も見て話ができるように、掲示場所を幼児玄関や研修室前壁面等に移して紹介する機会を増やす。	一年を通して、研修室前の壁面に幼児の作品を展示し紹介することができた。親子で作品を見て話をする機会が増えただけでなく、教員にとっても担当クラス以外の子どもの成長を知ることができ、保護者に伝えられる機会となった。	A	A	
	横断歩道の渡り方や信号機の見方についての交通安全教室を実施する。親子で参加することによって、幼児・保護者ともに事故を未然に防ぐための安全な方法について理解を促す。	親子参加の交通安全教室を実施できた。横断歩道の渡り方、信号機の見方を確認し、交通安全教室後も校内の駐車場を歩く時に活かすことができた。	A	A	
「ほけんのおはなし」などの健康教育や日常の保育を通して、幼児自身が自分のからだや健康に興味や関心を持ち、小学校入学までに基本的な生活習慣を身に付けることができるように支援する。また、幼児期に気づけたい疾病(弱視予防や歯と口の健康など)については、学校医と連携し健やかな成長・発育を促す。	担任と相談・協力し、各学年の状況に合わせたほけんのおはなし等の健康教育を実施した。幼児は自分のからだや健康について興味・関心が強く、積極的に意見や思いを伝える場面が見られた。今年度も感染防止の観点から、はみがき教室等を再開できなかった。	B	B		
研究部	(イ) 幼児一人一人の実態把握を的確に行い、聞こえや発達の課題に即した指導を通して、幼児の個性と能力の伸長を目指す。				
	保育の様子をビデオに撮って教師全員で見て、保育の進め方、子どもへの関わり方、言葉かけの仕方等について共通理解し、指導に必要な力を高める。	全員がビデオでの授業研究に取り組めた。基礎的な子どもへの関わり方から保育の進め方、アドバイス等についてグループで意見交換したり、発表して全員で共有したりすることで、指導力の向上につながった。	B	B	
	(ウ) 家庭と協力をして教育を進め、愛情に満ち心の通い合う育児が行えるよう、保護者の支援を行う。				
	保育相談部では、聴覚障害の基礎的な知識や親子のかかわり等、様々なテーマで研修を行う。幼稚部では交流について等、各学年に合わせた内容の研修に加え、難聴学級の教育や本校卒業生保護者の話等、卒業後の進路や子育てについて考えることができるテーマの研修を行う。	各部で「子どもとの関わり」「こばを育む」「発音」「聴こえについて」などの保護者研修を行い、保護者が今の子育てや聴こえについて向き合ったり、子どもの卒業後の姿をイメージして今後の子育てについて考えたりする機会を設定できた。	A	A	